

---

# 想いは流れる水のように

柚木あずさ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

想いは流れる水のように

### 【コード】

N1131D

### 【作者名】

柚木あずさ

### 【あらすじ】

幼なじみの恋愛話に付き合わされる……なんて泣けるシチュエーションがあるだろうか。

想いは流れる水のように

(前書き)

企画小説に参加しています。テーマは「水」  
「水小説」で検索すると他の作者さんの作品もご覧になれます。

想いは流れる水のように

想いは流れる水のように

川には自浄作用がある。汚れたとしても流れてゆくうちに薄まって、さらにはそこに住まう生物たちの働きで澄んだ元の流れに戻っていく。

想いは流れる水のような。何度ケンカをしてもオレは美砂を嫌いにはなれなかった。ご近所さんなうえに母親同士が親密となれば、長々と睨み合っているわけにもいかない、というのが理由のひとつだ。そして決定的なのは、いつの間にもやら温かい気持ちがあった。と根づいてしまったこと。悔しいことに、嫌いにはなれなかった。

濁っては澄んでを繰り返すうちに、元の流れ以上に透き通ることもあるだろう。それは心の自浄作用。想いは流れる水のように限りなく澄んでいく。

昼下がり、ファーストフード店、お悩み相談。相談者は清浦美砂、先月末をもって19の華の大学生。高校卒業を期に染めたセミロングも馴染み、大学生風のファッションも板についてきている。格好に従うように、元来の男勝りな気質もずいぶんとなりを潜めてしまった。くわえて四六時中つけている化粧の魔力が、少女から女性へ、可愛いから綺麗へと生まれ変わって来ている。脱皮の様 変遷を見て来ている者にとっては面白おかしく、興味深いものだとは思っている。ただ、少しの居心地の悪さと妙な苛立ちを覚えているのも確かかなわけ。

ともかく美砂は、そう経たないうちにかなり変わったと思う。何、と言われればはてなマークを出すしかないが、きつと色気の類。あ、イヤ〜ンな意味ではなく、目に見えないか、目につきにくい変化な



良く言えば頼られているんだろうが、男に非ずという扱いの気がして素直に喜べない。

恋愛話なら女同士でやってるよ、とツッコミを入れてはみるが、いい加減愛想をつかされたらしい。無理もないか。付き合っただけのサイクルが異常なんだ、コイツは。天性の惚れっぼさと持ち前の行動力をフル活用して、かなりの俊敏さで恋人関係まで持ち込めたいらしいが、気付いた日には相手が変わっているという始末ひと月続けば良い方で、日替わりの時もあったな。モテカワスリムで恋愛体質の愛されガール、なんてどこぞの漫画のようなキャラ設定した女が目の前にいる気持ち、分かるだろうか。

「つか、なんでオレなわけ。頼りにならねえっつーんなら他を当たれ」

「毎度のことですよ。いまさら気にしない気にしない」

「気にする。だからなんでオレなの？」

「幼稚園から高校まで連れ添った仲だったに、つれないなあ。ホラ、イメージしてみなさいよ。苦悩する幼なじみに救いの手を差し延べる、ああ、なんて素晴らしき……隣人愛？」

「最後、何て言うか迷ったろ」

こうやって美砂お気に入りの店で慰める……慰めるというかストレス発散に付き合わされるのは毎回のパターンだ。内装はわりと小洒落ていて美砂好み。喫茶店でなくハンバーガー屋なものも美砂らしい。美砂はポテトをくわえて遊びながら、傷心の乙女にあるまじき呑気な顔で疑問を口にした。

「しかしまあ、なんでこう長続きしないのかなあ」

「どうしてだろうね」

「こんな美女が彼女で何の不満があるだろうか、いや、ない」

んな力説せんでも。が、こんだけ自分に自信持てるのもすごい話だ。ノリ的にはドロップキックかまして目を覚まさせてやるのが礼儀だろうが、ツッコむにツッコめない容姿をしているから悪質だ。そこだけは認める。「冗談抜きで可愛いと思う。絶対言ってはやらな

いけど。

「実際不満があるから別れるんだろ。問題があるのは確實、お前の方だろうけど」

ま、いくら綺麗所でも、目の前にいる男の気持ちも知らずのほほんとしているような鈍感娘とじゃ続けようにも続かないだろうよ。そう言ってやりたいのは山々だ。が、言えたらとうの昔に言っているわけで、言っていたらこんな状況にはいないだろうとわけで。喉元でうねる言葉をハンバーガーごと飲み込んだ。

「まあ、向こうさんから切り出されるのも初めてじゃないですからね、シヨックを乗り越え理由の方はしつかりと問いただしてやりましたよ。そしたら何て言ったか」

美砂の言葉をBGM程度に聞きながら、ナゲットを口にほりこみジューズで飲み込む。ああ、この場から逃げ去りたい。

「あいつ、私といるのつまらないって！ 感性が合わないなんてよくあるじゃん、知る努力くらいしろっての」

それは感性の合っていないやつをわざわざ選んでるからじゃねーの？ とはさすがに言えない。感性の一言ですませられるならオススメがココにいますよ。……とも言えない。

「マジで男見る目ないよな。前のは元カノが押し掛けてきてうやむやになって、その前のはケンカ別れ。さらにその前は3股だっけ？」  
呆れすぎてむしろ口数が増えるよ。たいした豪遊ぶりだ。それを把握している自分もどうだろうとは思っただけ。

「んにゃ、4股だったね、あれは。君が1番だ〜とか言われたけど、どうだか」

「余計悪いだろ。よくそんだけ別れられるなって感心するよ。一緒にいて楽しくねえって思えるやつの気もしれねえけどさ」

ポテトをつまみ、間をおいて一人青くなる。

しくった。うっかりにもほどがある。本心もらすバカがどこにいるっつーんだよ、ここにいたよ！

時間的には短かったと思うけど、赤くなったり青くなったりを繰

り返した。いくら恋愛体質だつっても変な顔してるだろうな。まあ、告ったわけじゃないし、さらっと流してくれる……わけないか。基本抜けてるくせに、そういう揚げ足取りは上手いんだよ、コイツ。恐る恐る顔を上げてみると、美砂は案外あっさりとしていた。

「何それ。あんたは楽しいってか？」

「……放送事故だ。忘れる。お前といると疲れる」

ハンバーガーに手を伸ばすとさっと掠め取られる。美砂はそのままパクリとかぶりついて、唇の端に残ったソースを指でぬぐった。

「あ〜、これ美味しいじゃん。こっちにしとけば良かった」

美砂は自分のをちぎるとスツと差し出す。お返しのつもりか。とりあえずさっきの発言は気にしてないらしい。良かった良かった。おかげで喉渴いたよ。ふう。

「ね、私と付き合ってみる気ない？」

がふつ。うげ、気管に入った。……つか、今何をたまわれやがった、このアマは。

「考えたらさ、生まれた時からほぼ一緒にいるじゃん。それって実質最高記録なわけ。お互い相性バツグンってことっしょ？」

美砂はにこりと微笑み頬杖について見つめてきた。ったく。待たれなくても答えはもちろん……。

しばらくのち、オレたち2人は同じ店にいた。くしくも同じ席、同じメニュー、服は若干厚着になっている。大きく違うのは、美砂がきらきらと瞳を輝かせている点。ただし、その口から漏れるは知らない男の名前だった。そうだ、オレは付き合って半月もしないうちにあっさり恋人関係を解消してしまったのだ。いや、分かってたよ。分かってたつもりだよ。そりゃちよつとは期待したけどさ。

恋多き乙女の頭はすっかり新しい男のことで占められている。救いはといえばまだ美砂の片思い、という状況。おしむらくはその状況を打破するための恋愛相談に付き合わされている、という追い討

ち付きという点。オレにトドメを刺したいのか？

「別れた男にそういう話するか？　しかも別れたほとんど直後に」「直後って、別れたのは昨日。あんたなら24時間もあれば十分っしょ」

時間の問題じゃ……いや、時間の問題か。せめて傷が癒えるまで待つてくれてもいいだろ？　そんなにタフじゃないんだよ、オレはんな短時間で復活できると考えられる美砂の神経が信じられない。

「まあ、普通、元彼にはしにくい話だろうけどね。まして、こっちから振ったわけだしさ。でも、友達相手にゃ構わないでしょ」

「友達てお前……」

赤い糸は切れても他の糸はしつかりつながっていることに、不覚にも安堵をおぼえた。やべえ、涙出そう。物理的にも心理的にも、前と同じ場所にいる自分が情けない。美砂は、今でも不思議なフェロモンを撒き散らしているのだ。

「でもやつぱ、ここが一番落ち着くかも。ありがとね。あんたがいて本当に良かった」

プラス満面の笑顔。どうしてこんなやつを好いてしまったのか。今世紀最大のミステリーだ。

美砂の言葉を適当に流してほおばったハンバーガーは、やたらパサパサとしていて、味なんてわからなかった。

一滴の水はめぐりめぐって元の水源にたどりつくのだという。想いは水だと言うのであれば、万が一に賭けてみるのも悪くない。それが何日、いや何年、下手をすれば何万年先になるかは分からないが。

想いは流れる水のように柔軟に、そして限りなく澄んでいく。

想いは流れる水のように

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1131d/>

---

想いは流れる水のように

2009年3月24日09時12分発行